

## 岸俊男会長の思い出

平野邦雄

本会の会長であり、奈良県立橿原考古学研究所長、愛知学院大学教授、京都大学名誉教授岸俊男氏が、去る一月二十一日、閉塞性黄疸のため逝去された。享年六十六才。まことに悲しい限りである。本学会における偉大な業績をしのび、哀悼の意をこめて、ここに一文を草することとしたい。

岸さん——生前のようにこう呼ばせて頂きたい——の経歴と著書論文は、岸俊男教授退官記念会『日本政治社会史研究』上・中・下(昭59・60)の巻頭と巻末に詳しく記されているので、それに委ねることとし、ここでは岸さんの学風と業績を私なりにまとめ、あわせて本稿学会との関係を記し留めおくこととしたい。

岸さんのお名前を私が知ったのは、昭和二十五、六年、つまり岸さんが京都大学助手から奈良女子大学講師に移られたころで、「古代村落と郷里制」(『古代社会と宗教』昭26)、「古代後期の社会機構」(『新日本史講座』昭27)などの村落制度、郷里制についての論文、もう一つは「越前国東大寺領庄園の經營」(『史林』三五一、昭27)はじめまる東大寺領の經營をめぐる政治史の論文に接したときである。前者は戸籍・計帳、後者は東大寺関係文書、いうならば正倉院文書

の分析を基礎とする論文で、史料から正確に史実を抽出してゆく技法の見事さに敬服した記憶がある。ことに戦後の粗末な紙に印刷されたこれらの論著はなつかしく、今もすべて私の書架にある。

岸さんの聲咳に悠々接したのは、昭和三十三年から三ヶ年、竹内理三教授を代表者とする研究グループで、正倉院の戸籍・計帳の原本調査を行ったときである。面白い上張りを着て、端然とした姿勢で文書のスケール、界線、継目、国印などを一々計測し、裏文書を照合し、一字ずつ文字を点検してゆくその姿は、まさに顕微鏡で対象物を観察し、試験管に試薬をそそいで反応をたしかめる科学者のそれを連想させた。物に即した精緻な学風は、まさにこれと通ずるのであろう。その後、戸籍・計帳の研究は、造籍年次、計帳手実、古代人名、さらに班田などの個別研究に進み、『日本古代籍帳の研究』(昭48)にまとめられ、東大寺領の研究は、造東大寺司、藤原仲麻呂、さらに光明立后や元明太上天皇の崩御をめぐる政局へと進み、これにワニ氏や紀氏などの政治的氏族の研究が加わって、『日本古代政治史研究』(昭41)にまとめられたことは周知のとおりである。

昭和三十八年ごろ、ことに四十年代から岸さんの研究の主対象は

宮都、古道、木簡、金石文のような考古学と歴史地理学をふまえた分野に次第に移行してゆく。それは平城宮にはじまる各宮都や大宰府などの発掘調査の進展という外部事情によるが、それにもまして史料や遺構、遺物という物に即した研究の延長線上にそれらが位置づけられたからであろう。岸さんの学問の真骨頂を示す分野である。『木簡研究』創刊号(昭54)の巻頭に、岸さんみずから昭和三十六年に平城宮跡で木簡がはじめて発見され、その後、東北から九州におよぶ遺跡からも木簡の出土が相つき、文献史料に限界のある古代史研究に無限の可能性がひらかれたと記されたが、その無限の可能性をまずみずからが、しかも真正面から追求されたのである。

昭和四十二年、藤原宮跡と木簡についての論文を皮切りに、昭和四十五、六年から飛鳥・藤原・平城・難波におよぶ古代の都市計画―地割りや古道の論文が相つぎ、「都城と律令国家」(岩波講座『日本歴史』昭50)、「朝堂の初步的考察」(権原考古学研究所論集)昭50)、そして藤原京、平城京と中国都城の比較研究といういずれも先駆的な業績が生れた。一方で木簡研究の課題を論じ、「宣命簡」(日本文化史論叢)昭51)、「木と紙」(日本史論叢)昭51)といった個別研究をも発表された。丁度このころ、昭和五十三年、埼玉県の稻荷山古墳の鉄劍に銘文が発見され、その解説と解釈はその後の研究の動かぬ基本となつたのである。『宮都と木簡』(昭52)や、『遺跡・遺物と古代史学』(昭55)はそれらの成果である。

木簡学会が設立されたのは丁度このようない時であった。昭和五十二年十二月、奈良国立文化財研究所の主催による第三回木簡研究集会の終了後に、独立の学会を設立することが提案され、準備委員会に付して協議することになり、その結果、昭和五十四年三月末の総会で正式に発足することになった。協議の過程で会長は当時、京都大学教授でおられた岸さん以外にはないということで、強いてお願ひしたのであるが、これまでのべた研究歴から言つて、それは当然のことであった。しかしそれだけ余計な負担をおかけすることになつたこともまちがいない。そして、昭和五十六、七年ごろから、日本中の宮都の比較や新発見の遺物や史料の解説について、雑誌・新聞・テレビなどとの交渉もいちじるしくふえ、ことに昭和五十九年四月、京都大学教授を定年退官され、最初に記したあたらしい職務につかれたことで、かえつて多忙になられたように見受けられた。しかも、この間、さらに『古代宮都の探求』(昭59)を出版されたのである。学会の委員会で、"お忙しいでしよう"と健康を案ずると、"いや、大丈夫ですよ"と答えておられたのが印象に残る。会長として在任八年、木簡学会も十周年を迎えるとき、逝去されたのは惜しみても余りある。岸さんの業績は、その信頼性によつて、永く後学に伝えられることはまちがいない。御冥福を心よりお祈りして、筆をおきたい。